

武蔵野台地東辺における 縄文時代中期の集落景観

Colony Landscape on the Eastern Margin of the Musashino Daichi
in the Middle Jomon Period

宇佐美哲也

USAMI Tetsuya

はじめに

①武蔵野台地東辺における縄文時代中期遺跡の分布

②主要中期集落遺跡における集落景観の検討

③住居施設の変遷から見た集落の変遷

④大規模集落遺跡と小規模集落遺跡

まとめ

【論文要旨】

武蔵野台地東辺における縄文時代中期の主要集落遺跡について、土器の細別時期ごとに住居分布を検討した。その結果、いずれの集落遺跡においても、一時的に住居軒数が増加し、住居が環状に分布するような景観を呈する時期が認められるものの、基本的には1～数軒の住居が点在するような一時的景観を基本として、住居数の増減を繰り返したり、途中断絶を挟みつつ、変遷していることが確認できた。大規模集落跡、環状集落跡とされる集落遺跡も、住居が環状に分布するような景観が途切れなく継続する姿は復元できない。また、住居数が増加する時期は、各集落遺跡により違いがあることから、その要因は、各集落遺跡、各地域ごとに異なる可能性が高いと想定した。

あわせて、周溝、支柱穴、炉など住居施設の変遷を検討した結果、ひとつの集落遺跡が、最初から最後までひとつの集団により計画的、継続的に営まれたと考える材料は得られず、むしろ各時期とも多様な住居形態が混在する様相が明らかであることから、ひとつの集落遺跡も、時期ごとに拡大・縮小を繰り返していたであろう異なる集団の領域が、相互に複雑に重複することで形成された可能性が考えられる。

したがって、大規模集落跡と小規模集落跡の差は、集落の質的な差ではなく、その場所が居住地として利用される頻度の差を示しているものであり、時期ごと、遺跡ごとに異なる利用頻度の差が何に起因するのかを解明することこそが、各時期における居住地の選択や、環境、生業等を解明する手掛かりになるものと考えられる。その意味では、定住か移動かといったこれまでの集落論にみられるような二項対立的な議論のみに立脚して集落遺跡を検討するのではなく、一定地域における定着のあり方とその実態を、個別の集落遺跡の検討を通じて明らかにしていく視点が求められる。そのため、各集落遺跡における一時的景観の復元と平行して、出土土器の様相、住居形態など様々な考古学的要素をあわせて検討することにより、各時期・各地域における定着の範囲とその内容を解明していく努力が求められる。

【キーワード】 縄文時代中期、武蔵野台地東辺、集落、一時的景観、断絶性、定着